
回りくどすぎるラブストーリー

赤眼鏡の白チョーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

回りくどすぎるラブストーリー

【Nコード】

N0268Y

【作者名】

赤眼鏡の白チョーク

【あらすじ】

中々鈍感な主人公と誰に対しても白状な友達と空気よくわかってない友達が、野獣：じゃなくて男子達と織り成す、本当回りくどいギャグとか真面目とかのほのぼの恋愛ストーリーです。見守ってください：作者も最後どうなるかわかっていないので（＼＼、）↑

回りくどく一周します

「叶さんってどこにいる？」

そんなに大きくない声だったのに、彼が言葉を発しただけで不思議と耳に入った。

彼、とは我が校の王子こと宮野真斗君。日本人とは思えない鼻筋とぱっちり瞳に低いテノールボイスで囁かれたら、落ちない子はいないと言われている。こっそり女子の間では宮王子と呼んでいるが。

その、宮王子が呼んでいる。誰を？

……………私を。

「唯ちゃん、今すぐ私の存在を地球上から消してくれ……！」

「今から机の下に隠れても、ほら、王子に話し掛けられた子がお前のこと漏らしてるぞ」

「オウジ、珍しいネ」

「やだ、やだー！私の人生が終わってしまう！」

「見物だね」

「ダネー」

ガタガタと机の下に入ろうと暴れていたせいか、周りの人が離れていく。

え、ちょ、何これATフィールドか。

「叶さん」

「…うわあ、はい。」

あ、第一声に心の声が。うわあ、とか言ってしまった。

「聞きたいことがあるんだけど」

宮王子がそう言うと、机の下でご飯を摘んでいた私の目線に合わせ
てしゃがんできた。

……見てはいけない世界がある気がして向こう見れないや。…卵焼
きうまいなあ。

「…昨日の夜、会ったよね？」

「会ってませんけど」

後ろで羨ましくこっちを見てる女子が怖くて敬語になります。ひい。

「…会ってない？昨日駅前の路地で、歌ってなかった？」

歌ってました。私です。

しかも宮王子と目が会ってダッシュで逃げましたとも、ええ！

「…歌？知りませんけど」

「…」

しばらく何も話さないと思った時、宮王子は静かに立ち上がった。

「…そう、か。ごめん急に」

ちよっと困った笑顔。落ち込んでいるのが凄く、わかった。

「おう…宮野君、路地の歌とか聞くんだけ？」

唯ちゃん、王子って言おうとしたね…っ！

「たまに、ね。昨日聴いた人で、凄い上手い人がいて…。叶さんに似てたから勘違いしたんだ」

「へえー…」

顔に面白いって言葉を貼付けた唯ちゃんが私を見ている。見なくてもわかってるから…。

「こんなに熱心に探すとは…お…宮野君にも春が来たか」

「ハルハルー」だから唯ちゃん…王子って言いそうになってるよ。

「春って…そういうことじゃないと思うけど」

「でも気になってるんでしょ？」

唯ちゃんにそう言われたときの王子は、

ただ笑って何も言わなかった。

この日私は、路地に出る回数を減らそうと心に決めたのだった。
なのに、平穏な学校生活は消え去っていくのだった――

回りくどく二周しました

「あの…」

「うん？」

「…何でもないです」

あれ、これ何て言うデジャウ…？

いつも通りに四時限目が終わって、唯ちゃんとシェイと一緒に教室を出て。

学食に来て大好きなトンカツ定食を頼んで、席に座ったら：

宮王子が、いました。

……………私の隣に

「ゆ、ゆ、ゆ唯ちゃん助けて…！私の存在感をミジンコの小ささにして…っ！」

「大丈夫、今のお前の存在感は学園内で一番だ」

「安心ダネ」

「お願いだから、そんなカレーうどん食べながら簡単に言わないで…！」

爽やかに生姜焼定食を食べる宮王子の隣で、ガタガタ震えながらトンカツをつまむ私。さくさく衣と肉汁美味しいなあ。

「まあ、あえて放置してたけど何でお、じゃなくて宮野君はちゃっかり座ってるの？」

「友達を待っていたんだけど、中々来なくて。そのとき叶さん達が見えたから、こないだのお詫びがしたいなと思って」

宮王子の仲間達よ、何故早く来なかった…っ！

そして宮王子よこっちを笑いながら見るなし！

「オ詫び？」

「うん。学食特製プリンでどう？」

そういった瞬間、唯ちゃんとシェイの表情が変わった…獣に。

ちなみに学食特製プリンとは、学生により激しい奪い合いが披露される、一日20個限定の激うまプリンである。

「宮野君、好きなだけいていいのよ!」

「プリンー!」

「……………」

二人のはしゃぐ姿が眩しいよ。人って…安いなあ……

「叶さん」

「はいい!」

「叶さんはよく学食で食べるの?」

「あ、いえ…たまに。今日はシェイが学食がいいっていうからです」

宮王子の顔を見るのが怖くて顎先しか見れない…。

「同じクラスなんだし、敬語じゃなくていいよ?」

次の日宮王子ファンのクラスの女子に殺されるので無理です。

今話しているだけで視線が。視線が刺さっているんですよ!

「真斗ー」

ざわざわと騒がしかった学食が入口から静かになっていく。人込みがモーゼの状況になっていくのは何故…や、嫌な予感しかありませんが。

「彰、怜」

きらびやかな、つまりはイケメンが二人歩いてきます。宮王子のことを呼んだ方のイケてる人は彰といい、赤のオールバック、耳に付けたピアスなど野獣的な匂いを出している。野獣だ野獣。

もう一人、野獣彰の後ろにいるイケてる人が怜といい、普通の黒髪なのに切れ目の瞳と全身黒めの服から醸し出される幻想的な雰囲気。が堪らないらしい。根暗さんか。

「お、女の子と食べるなんて珍しいじゃん」

「彼女達はクラスメイトなんだ」

何が凄いて、学園で騒がれるイケメンを前にして貰えたプリンに食いついている女子が二人いることだよね。

「∴今日は厄日だなあ」

ぽつりと呟いた私の言葉は騒がしい空気に吸われてしまった。

回りくどく三周目です

「あれ、こんにちは」

：どうしよう野獣に食べさせる食べ物持っていないぞ私。

昼休みにシェイと一緒に飲み物を買いに廊下を歩いていたら、廊下に隣接している我が校誇る花が咲き乱れる庭から赤い野獣がやって来た。

紫陽花が咲く美しい庭から赤い大男がくるのが異様な光景です。

シェイは横で誰だっけこの人って顔で紙パックジュースを飲み続けてます。私も無視したいですね。

「えと、シェイちゃんと久菜ちゃんだよね？」

「：ああ、コナイダの人だ！」

おおおう、シェイちゃん言っちゃったよ！学園でイケメンって言われてる人の顔覚えてないんかい！

「二人で何してるの？」

「彰あ知り合い？誰誰え？」

野獣彰さんの横からふんわりとした巻き髪の可愛い女子が出てきた。腕に抱き着いて上目遣いで話し掛けている。

あれだ、ギャルだギャル。

「真斗の友達だよ」

あれ、いつから私達宮王子の友達に昇格したんだろう…。

ギャルはこちらをちらっと見てふっと鼻で勝ち誇った様に笑った。笑いやがったこのギャルめ！

「彰の彼女の鈴香でーす」

「おいおい、彼女じゃねーだろ」

「ええー、いいじゃん」

いちゃつく二人を前に呆然とするしかないです…。

シェイを見ると紙パックジュースの成分表を真剣に見てる。流石。

シェイはしゃべることは片言だけど外人らしい少し焼けた肌とくつきりした鼻筋とか本当可愛いと思う。ギャルなんかよりも可愛い！

「ネ、久菜」

「ん？」

「よくワカンナイけど、行ってもいいカナ？」

え、と私が呟いたと同時にシェイは野獣の方を向いてにっこり笑いながら言った。

「ワタシたち、もう行きマスネ」

シェイ以外は驚いて固まった。

え、シェイさん。この人に興味ないのね、飲みきったから飲み物買いに行きたいのね…。

「あ……」

何か言おうとした野獣を無視して歩き始めたシェイに続いて私も歩く。

やーいやーい！イケメンだからって女子が全員振り向くと思うなよイケメンこの野郎！

「流石、シェイ」

「ナニが？」

立ち尽くした野獣が「マジか…」って呟いてシェイを見ていたなんて気づかなかった。

回りくどく四周目を

お昼である。

普通の学生であれば友達と楽しく話したり、待ちに待った昼ご飯を食べるだろう。

私達も机にお弁当を広げてのんびり過ごしていたんだけど。

……何故睨み合っている。

「唯ちゃん、ちよつとシェイちゃんと話したいんだ。どけてくれる？」

赤の獣、彰が笑顔で唯ちゃんに話しかけているが、顔が笑ってない。ってか明らかイライラしている。

「私は羊が獣に食べられないように、守っているだけですよ？」

唯ちゃんも笑顔で返答すると、目に見えない火花が散る…。

野獣：彰はシェイと話した翌日から、彰はしつこくうちのクラスに来るようになった。

相手にされなかったことで逆に興味が出たらしい。Mか。

「二人とも、ご飯くらい静かに食べようよ」

そして宮王子もいる。

………私の隣に。

どうして運命の神様は私に冷たいんですか！距離を置くために、教室の奥にいるシェイの方にずれると宮王子も隙間なくぴたりくつついてくるうう！

「叶さんってカラオケに行ったりするの？」

「ぼ、ぼちぼち」

「そうなんだ、じゃあ今度俺と行こうよ」

歌わせようとしてるよ、宮王子まだ諦めてなかったよ！

助けを求めるように唯ちゃんの方を見ると、殴ろうとした唯ちゃんを避ける為に、獣彰に壁として差し出された無口伶に抱き着かれていた。

すぐさま教室が女子の悲鳴に包まれる。

「ゆ、唯ちゃん！」

「ユイ！」

私とシェイが慌てて声をかけたけど、怜はぼそっと、抱きまくら…と呟いた。…嗚呼、寝ぼけてんのね、なるほど。

「って寝ぼけないで、起きて！」

引きはがそうと立ち上がったけど、固まってた唯ちゃんの方が早かった。

「どらああああああ！」

強烈な右ストレートが決まって、無口怜の体が飛んだ。

「……………」

「…説明を求めてもいい？」

「あー、唯ちゃん男に触られるのダメなんです。見た通り、触ると手がでます」

「なるほど。怜、生きてる？」

宮王子に声をかけられた根暗怜は、野獣彰に支えられてぼーっとしている。

「……………生きてる」

「お前丈夫だな」

「唯ちゃん、大丈夫？」

「あーびっくりした…この獣、次覚えてろよ！その顔殴ってやらあ！」

「ユイ、落ち着イテ。ヤンキーにモドってるから」

「怖いよねー、シェイちゃん」

「巨人獣に言われたくないわ！」

「きよっ…何だと！おい、真斗聞いたか！」

「うん。凄いね永澤さん、よくわかってる」

「……………本当のこと」

「フオローはないのかよ…」

「ね、ねえねえ小川さん達、宮野君達とどういう関係なの！？」

騒ぎ出した私達を気づけばクラスメイトの女子達が恐ろしい目で囲んでいた。

——あれ、私の平穩はどこ…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0268y/>

回りくどすぎるラブストーリー

2011年11月23日22時47分発行